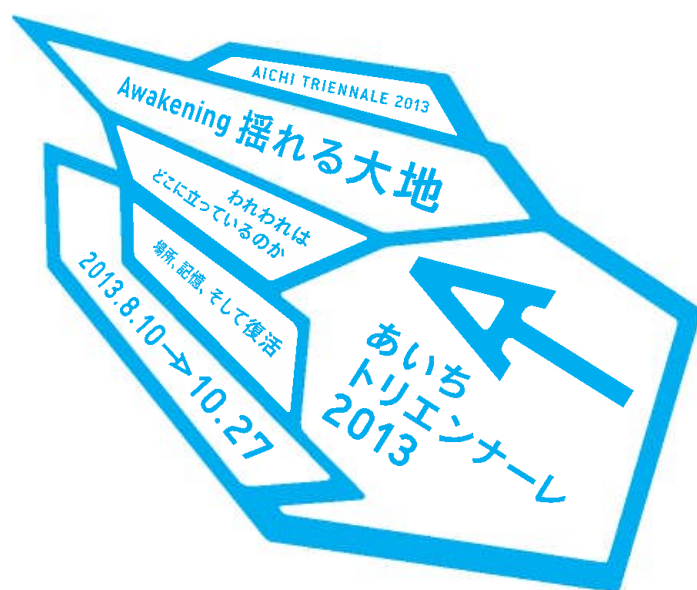


参加アーティスト紹介

(平成24年12月4日発表分)



参加アーティスト ※アルファベット順

現代美術



青野文昭(あおの ふみあき / AONO Fumiaki)

1968年宮城県生まれ。仙台市を拠点に活動。リアス・アーク美術館や宮城県美術館などで作品を発表してきた。1990年代から海岸の漂流物など、さまざまな場所で壊れたモノの欠片を拾い、「なおす」と称し、それを補完する制作手法を継続している。だが、青野は再び使えるモノとして正確に復元するわけではなく、「修復」を通じてむしろ使えない異物に変容させてしまう。近年は異種混成的な補完も展開している。自身も少なからず被害を受けた東日本大震災の後は、自宅近辺や親戚宅、馴染みの場所をはじめとする被災物件からでた瓦礫を用い、様々なアプローチでその「補完」を試みることにより、あるべき再生の姿を探求している。しかし、別の用途に役立つリサイクルでもなく、機能しない何かを「創造」する姿勢は変わらない。震災という歴史的な事象は彼の作品の意味を変えた。震災前から震災後の制作を変わらず行っていることも特筆すべきである。

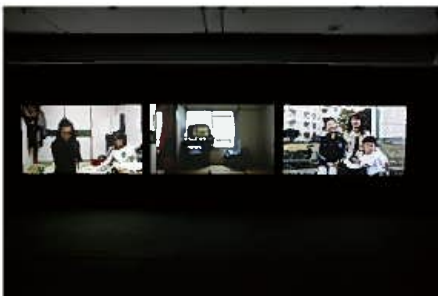
《なおす・代用・合体・侵入・連置—震災後の石巻で回収した麻船の復元》2012
courtesy of the artist



ステファン・クチュリエ(Stéphane COUTURIER)

1957年パリ生まれ。パリを拠点に活動。2003年にマルセル・デュシャン賞にノミネートされる。また、同年にはニエプス賞を受賞。フランスを代表する写真家の1人である。彼は自動車工場の内部や宅地開発の現場、大都市の建築物などを撮影した写真で特に知られている。これらの風景には世界規模で進む社会の変化の様相が刻まれており、私たちが生きる世界の流動性がダイナミックに表されている。そのため彼の作品は、建築や美術といった文脈のみならずドキュメンタリーや社会学といった視点から見ても興味深いものとなっている。中でも「メルティング・ポイント」シリーズは、複数の視覚的要素を重層的に掛け合わせることで制作されており、まさにハイブリッドな現代社会を反映したシリーズである。人工的ながら奇妙な現実感をも備えたそれらのイメージは、見る者の視線を捉えつつもはぐらかし、多様な要素が絶えず結合と切断を繰り返す現代社会の複雑な現状を指し示すかのようである。

《Melting Point, Havana no.2》2006-2007
courtesy of the artist



ニナ・フィッシャー&マロアン・エル・サニ(Nina FISCHER and Maroan EL SANI)

1965年エムデン(ドイツ)に生まれビジュアル・コミュニケーションを学んだニナ・フィッシャーと、1966年デュイスブルク(ドイツ)に生まれ映画学を修めたマロアン・エル・サニによるユニット。1993年よりベルリンを拠点にコラボレーションを開始。社会や政治体制の変化の結果、本来の目的を失った建築物や場の歴史、記憶、痕跡、そして複雑に絡み合う人々の思いに注目し、ドキュメンタリー、フィルム、写真、漫画など様々な方法論とメディアを横断した映像作品を制作してきた。光州ビエンナーレ(1995、2002、2008)、マニフェスタ4(2002)、イスタンブール・ビエンナーレ(2007)など世界各地の国際展やレジデンスで活躍する一方、1996年以来日本でも数多くの展覧会に参加。2007年~2010年には札幌市立大学准教授として札幌を拠点に活動した。日本で制作された代表作には、軍艦島の撮影取材を基に制作され世界各地で高い評価を受けている映像インスタレーション《Spelling Dystopia/サヨナラハシマ》(2008-2009)、成田空港周辺農地の歴史を紐解いた《ナリタ・フィールドトリップ》(2010)など。東日本大震災後も日本の状況を常時気にかけてながら震災前後の人々の日常の変化をテーマにした制作を継続しており、その第一作である《Spirits closing their eyes》(2012)は今年のメディアシティ・ソウル2012に出品された。

《Spirits closing their eyes》2012
Installation view, Media City Seoul Biennale 2012
courtesy of the artists and Galerie Eigen + Art, Berlin



藤村龍至 (ふじむら りゅうじ / FUJIMURA Ryuji)

1976年東京都生まれ。東京都を拠点に活動。東京工業大学で学び、2005年より藤村龍至建築設計事務所を主宰。独自のデザイン手法である超線形設計プロセス論を用いた作品、「BUILDING K」(2008)で注目を集めた。一方でフリーペーパーやウェブマガジンの企画制作、あるいはtwitterなどのメディアを通じた情報発信、また、2012年青森県立美術館「超群島 -ライト・オブ・サイレンス」展などのキュレーションも精力的に行う。東日本大震災後は批評誌の『思想地図β』において、福島県双葉町の住民の集団移転を想定したリトルフクシマの都市計画のほか、国土インフラの脆弱性を改善すべくリスクヘッジを考慮した第二の国土軸、また、ステーションシティを核とした都市の再編成を行う「列島改造論2.0」を発表した。最近では思想家の東浩紀が提唱する「福島第一原発観光地化計画」にも関わり、国土スケールから新しい日本の姿をデザインしようとする野心的な若手建築家である。

《列島改造論2.0》2012
photo: 新津保建秀



ハン・フェン (HAN Feng)

1972年ハルビン(中国)生まれ。上海を拠点に活動。ハルビン師範大学芸術課程で学んだ後、上海大学芸術課程の修士に進む。2008年にクリエイティブ・ニュー・アーティスト・コンペティションで審査委員賞、2010年、中国のジョン・ムーア現代絵画賞で最優秀賞、また、M50アート・ギャラリー賞を受賞。上海では、2009年ドン・ギャラリー、2010年上海現代美術館(MOCA)の「フライング・サークルズ」展、2011年アラウンドスペースにて個展を開催。また、2012年にはイギリスのマンチェスターにある中国アート・センターにて個展を開催。

また、2008年上海のZhu Qizhan Art Museum、ミラノ現代美術館、2010年上海現代美術館「+follow」展、2011年アルゼンチンで開催されたウシュアイア・ピエンナーレ、2012年に、コロンビアのボゴタ近代美術館やキューバのウィフレード・ラム・コンテンポラリー・アート・センターなどのグループ展に参加。彼がキャンバスに油彩で描く時にも、紙を折り畳んで作る彫刻によるインスタレーション作品を手がける時にも共通して見られるのは、その繊細な感性である。これは、新しい方法や材料に応用しながらも、伝統的な水墨画を学んだことに由来する。彼は、現代生活における状況を身体的かつ感情的に深く感じ取ることのできるアーティストである。それらが持つ意味へと我々の覚醒を促す。

《The Waves1》2010
courtesy of the artist



彦坂尚嘉 (ひこさか なおよし / HIKOSAKA Naoyoshi)

1946年東京都生まれ。神奈川県を拠点に活動。多摩美術大学のバリエードの中で展覧会を開いた美共闘のアーティスト。このときの作品から展開し、1970年、自宅の八畳間にラテックスを大量に流すフロアイベントを行ったり、ウッドペインティングのシリーズを制作している。また、ラカンの精神分析を背景にした芸術分析の理論を構築し、ブログを通じて発表するほか、歴史への深い関心から連続シンポジウムのアートスタディーズを企画した。2009年より立教大学大学院の特任教授に就任。近年は「空想 皇居美術館」(2010)など、建築界との交流を通じたプロジェクトも手がける。東日本大震災の後、京都に疎開したが、福島県南相馬の仮設住宅地の塔のある集会場では、外壁に「復活」という絵文字のグラフィティを描く。設計段階からアートが組み込まれた仮設住宅地は、ここだけである。そして彦坂は被災者の和歌を集めた「3.11万葉集・復活の塔」(2012)を刊行した。

彦坂尚嘉+気体分子ギャラリー・福島県南相馬グラフィティ《FUKUSHIMA 復活》2011
(建築設計:東北大学都市建築理論研究室+芳賀沼整・はりゅうウツスタジオ)
photo: 彦坂尚嘉+senkichi



ミハイル・カリキス&ウリエル・オルロー (Mikhail KARIKIS and Uriel ORLOW)

カリキスは1975年テッサロニキ(ギリシア)生まれ。ロンドンを拠点に活動。建築を学んだ後、音、映像、写真、パフォーマンスなどを使う横断的な表現を展開している。彼は人間の声について研究しつつ、コミュニティ、職業的なアイデンティティ、人権などのテーマを探究する作品を発表している。代表的なプロジェクト《Sounds from Beneath》は、イギリスの政策によって閉鎖された炭坑跡地にて、かつてそこで働いた高齢になった男達が当時聴いていた音(爆発、警報、蒸気、機械の音など)を思い出しながら歌う映像作品である。つまり、人の声が失われた日常的な労働の風景を甦らせるものだ。オルローは、1973年チューリッヒ(スイス)生まれ。ロンドンを拠点にマルチメディアのインスタレーションやサウンドの研究を行い、《Sounds from Beneath》の制作にあたり、記憶と歴史の場所としてのランドスケープに興味を持ち、カリキスと協働した。

《Sounds from Beneath》2010-2011
courtesy of the artists



アンジェリカ・メシティ (Angelica MESITI)

1976年シドニー(オーストラリア)生まれ。シドニーを拠点に活動。ニュー・サウス・ウェールズ大学で美術を学んだメシティは、ビデオ、パフォーマンス、インスタレーションなどの手法にサイト・スペシフィックな行為や、現実の出来事のフィクション化あるいは記録といったアプローチを交えた作品を作りだす。2010年パリのボンポドー・センターやロンドンのテート・モダンのグループ展で紹介された後、2012年メルボルンの現代美術センターACCAの新進作家紹介展「NEW12」で《Citizens Band》(2012)を発表。現在オーストラリアで最も注目を集める若手アーティストの一人として活躍している。高い評価を受けた本作は、空間に正方形に配された4つの画面それぞれに、移民のパフォーマーが自らが暮らす都市の一角で音楽を奏でる様子が鮮やかに映し出される。カメルーン出身のパーカッショニストは、パリの室内プールで水面を舞台に手で見事なドラミングをみせる。アルジェリアからパリに移住してきたストリート・シンガーは、メトロで壊れかけたカシオのキーボードを肩にのせ哀歌を歌う。モンゴルがルーツのホーメイ歌手はシドニーの街角で胡弓を奏でながら独特の声を響かせ、スーダン出身でブリスベンに暮らすタクシー運転手は、運転席で哀愁漂う口笛で曲を奏でる。音楽と共に生きる喜びと移民として暮らす複雑な現実の気配を漂わせながら、4名の圧倒的なパフォーマンスは、文化間の移動によって失われゆく旋律と歴史という悲しい現実を示唆しつつ、観る者を魅了する。

《Citizens Band》2012
courtesy of the artist and Anna Schwartz Gallery



Nadegata Instant Party (中崎透+山城大督+野田智子)

中崎透(1976年茨城県生まれ)、山城大督(1983年大阪府生まれ)、野田智子(1983年岐阜県生まれ)の3人によるアーティスト・ユニット。2006年より活動を開始。地域コミュニティにコミットし、その場所や状況において最適な「口実」を立ち上げる。口実化した目的を達成するために、多くの参加者を巻き込みながら、ひとつの出来事を「現実」としてつくりあげていく。「口実」によって「現実」が変わっていくその過程をストーリー化し、ドキュメントや演劇的手法、インスタレーションなどを組み合わせながら作品を展開している。代表作に2010年青森公立大学国際芸術センター青森での100名を超える市民スタッフと共に地元メディアをも巻き込んだ24時間だけのインターネットテレビ局《24 OUR TELEVISION》や、2011年パース(オーストラリア)Perth Institute of Contemporary Artsでの《Yellow Cake Street》では、架空のオーストラリア家庭料理「イエローケーキ」のレシピを地元シェフや市民と考案し、期間限定のケーキ店の開業を実現させた。

《24 OUR TELEVISION》2010
青森公立大学 国際芸術センター青森(ACAC)
©2010 Nadegata Instant Party



コーネリア・パーカー (Cornelia PARKER)

1956年生まれ。ロンドンを拠点に活動。近年、彼女の作品は、私たちがコントロールできない物事に形を与えたり、気まぐれなものを抑制したり、「台風の目」のような静かで瞑想的なものへと置き換えたりすることに向けられている。彼女はスチームローラーで押しつぶされたり、ひどく痛めつけられたり、崖から落ちたり、爆発をしたりする、漫画に見られる「死」の数々を模倣しているかのような、我々の世界における過程に関心がある。視覚と言葉による暗示の組み合わせによって、彼女の作品は文化的な隠喩や個人的な連想を誘発する。何の変哲もない日常のものが、何か説得力のある驚くべきものへと変容する。2005年テキサスのフォートワース近代美術館「フォーカス:コーネリア・パーカー」展、サンフランシスコのイェルバ・ブエナ芸術センター「コーネリア・パーカーによるニュー・ワーク」展、2007年バーミンガムのIKON、2008年ヘルシーのリマ美術館「ネバー・エンディングス」展、2010年バルティック・センター「ダウトフル・サウンド」展及び「ゲーツヘッドとノー・マンズ・ランド」、「二つの部屋」展、2011年ニューヨークのセント・マリウス教会にて、テート・ギャラリーとの提携で開催された「30枚のシルバー」展など世界中で多くの個展を開催。

《Perpetual Canon》2004
courtesy of the artist and Frith Street Gallery, London
Collection Fundación "la Caixa"



ニコラス・プロヴォスト (Nicolas PROVOST)

1969年ロンズ(ベルギー)生まれ。ブリュッセルを拠点に活動。1994年ベルギーのゲント王立美術アカデミー卒業。実験映画の文脈に連なる短編や、中・長編の劇映画、映像インスタレーション作品まで、多様なスタイルの作品を制作し、国際的な映画祭から美術展まで、様々な機会を通じて発表している。その作品は、映画を成立させている文法に着目して、その構造を露わにするもので、観る者に映像とは何かを意識させ、再考を促す、知的なアプローチに基づいている。近年では《プロット・ポイント》(2007)など、過去の映画から引用した映像を、本来の作品とは異なる文脈で再構築するファンド・フッタージと呼ばれる手法を模して、自らハリウッド映画風のショットを撮影、編集した、手の込んだパロディ的ニュアンスの作品も発表。日本ではイメージフォーラム・フェスティバル2007で2作品が紹介された後、あいちトリエンナーレ2010映像プログラムで11作品をまとめた形で上映している。あいちトリエンナーレ2013では、前述の《プロット・ポイント》、《スターダスト》(2010)とともに、三部作(トリロジー)を構成する、日本映画を再編集し、東京でも撮影された最近作である《東京ジャイアンツ》(2012)を加え、三本まとめて、上映する予定。

《東京ジャイアンツ》2012



リアス・アーク美術館 (Rias Ark Museum of Art)

1994年にオープンした宮城県気仙沼の美術館。漁業や津波など、地域の歴史文化を紹介するほか、東北のアーティストの展覧会を開催してきた。東日本大震災のときは、丘の上にあり、津波の被害は免れたが、学芸員たちが被災したほか、美術館が救援物資の保管場に使われたり、現場で被災の記録をとる特別業務などを遂行し、1年4ヶ月の閉館を余儀なくされた。リアス・アーク美術館は地方の文化施設として、震災後がまさに歴史の瞬間となり、未来に対して記憶を伝えていく役割を背負っている。学芸員が歩きまわって、震災直後から撮影された膨大な写真資料、破壊された街で収集された被災物などが、今後どのように展示されるのか。開館以来ここで勤務し、三陸の津波文化史を研究している山内宏泰が中心になって、被災地のリアス・アーク美術館が整備している東日本大震災の記録と展示は、長期的に伝承されるべき記憶について重要な指針を示すだろう。

《収集した東日本大震災による被災物》
撮影場所:リアス・アーク美術館敷地内保管場所
photo: 山内宏泰
courtesy of Rias Ark Museum of Art



アリエル・シュレシinger (Ariel SCHLESINGER)

1980年エルサレム(イスラエル)生まれ。ベルリンを拠点に活動。1999年から2003年まで、エルサレムのベツァレル美術デザイン学院で学ぶ。イスラエルやドイツの国外でも、個展を開催、グループ展にも数多く参加している。

シュレシingerは、ガスボンベ自体のガスが点火されてその胴体部分を焼き続けるように見える作品などで、今にも目の前で爆発するのではないか、というカタストロフの危険な状態を示すことで、鑑賞者に心理的な緊張を強いる。しかし、「そんなはずはない」という、かりそめのカタルシスという二律背反的な心理の状態へも導く。数枚の紙がテーブル上で立ち上がってダンスをしているようなユーモラスでメカニカルな作品も作る。いずれも、不穏さを強く感じさせるメカニズムと、そこで用いられる具体的な動きと素材の組み合わせが、緊張感を作り出し、同時にその緊張からのカタルシスをユーモラスに示す。こうした彼の作品群に、彼が感じる世界の政治状況のメタファーを見て取るのも不思議ではない。

《untitled (bicycle piece)》2009



カスパー・アストラップ・シュレーダー+BIG (Kaspar Astrup SCHRÖDER + BIG)

シュレーダーは、1979年デンマーク生まれ。ビジュアル・アーティスト/デザイナーとして、2004年に自身の会社Kasparを設立。コペンハーゲンを拠点に活動し、映画祭で受賞多数。映像作品の《MY PLAYGROUND》では、周囲の都市環境を利用しながら、走る、登る、跳ぶなどのダイナミックな動作を行うパルクールをテーマにしている。デンマークの建築集団、BIGの代表であるジャルケ・インゲルスは、パルクールを行うTeam JiYoに興味をもち、彼らを自身の建築作品に案内し、2009年からシュレーダーと協働して映像制作を行った。インゲルスは、レム・コールハースの事務所OMAの勤務を経て、2006年にBIGを設立。彼らは、代表作である上海万博のデンマーク館や複合施設「8House」では自転車の移動も前提とした動線を組み込み、歩行とは違うスピードでの空間体験を生みだしている。通常とは異なる身体の動きによって、空間の隠れた可能性を発見する行為は、パルクールと共通するだろう。

《MY PLAYGROUND》2009
courtesy of Kaspar Astrup Schröder



ソ・ミンジョン (SEO Min-jeong)

1972年釜山(韓国)生まれ。ベルリンを拠点に活動。ソウルの弘益大学と東京の多摩美術大学大学院で版画を学んだ後、2003年から2008年までドイツのシュトゥットガルト州立アカデミーで美術を学ぶ。複数の文化を横断しながら、主題を作品のなかに集約するミクストメディアによるインスタレーションを発表している。

物語性のある建物、歴史的な事件現場、社会構造のために疎外された地域などに関心を寄せるソ・ミンジョンは、これまでシリーズ作品「Sum in a Point of Time」(ある時点の総体)で、ドイツの美術館の展示空間や韓国の売春宿といった実在する建築物をモチーフにしてきた。発砲スチロールで約3/4のサイズに緻密に再現された模型をいったん壊し、それを会場内で一時的に解体された瞬間のように再度組み立て直し、展示する。いつか何らかの理由で失われてしまうかもしれない建物や人々の歴史と記憶の脆さを実際に体感できる作品をつくり出すことで、建物とそこに携わる人々がつ「過去」、本来は留めることができない「瞬間」、私たちが生きる「現在」といった異なる時点が重なり合う場を創出する。あいちトリエンナーレ2013では、名古屋市政資料館の地下留置所をモチーフにした新作を展示予定。

《Summe im Augenblick》2010



下道基行(したみち もとゆき / SHITAMICHI Motoyuki)

1978年岡山県生まれ。2001年武蔵野美術大学造形学部油絵科卒業。2003年東京総合写真専門学校研究科中退。砲台や戦闘機の格納庫など日本各地に残る軍事施設跡を4年間かけて調査・撮影し、出版もされた『戦争のかたち』シリーズ(2001-2005)や、アメリカ・台湾・ロシア・韓国など日本の植民地時代の遺構として残る鳥居を撮影した代表的なシリーズ「torii」(2006-2012)など、その土地のフィールドワークをベースにした制作活動で知られる。彼の作品は、風景のドキュメントでも、歴史的な事実のアーカイブでもない。生活のなかに埋没して忘却されかけている物語、あるいは些細すぎて明確には意識化されない日常的な物事を、写真やイベント、インタビューなどの手法によって編集することで顕在化させ、現代の私たちにとってもいまだ地続きの出来事として「再」提示するものである。2012年に開催された光州ビエンナーレでは新人賞を受賞。あいちトリエンナーレ2013では、愛知県内でのフィールドワークの成果を示す新作を展示予定。

シリーズ「bridge」(2011)より



フロリアン・スロタワ(Florian SLOTAWA)

1972年ローゼンハイム(ドイツ)生まれ。スロタワは、その制作スタイルを、ものを並べ替えること、あるいは配置されたコンテキストを再設定することとして、何もそこに加えることがない。彼の最初のシリーズは自分の家財道具を美術館の展示室に持ち込んで組み上げることであった。あるいは、美術館の展示室と自らの部屋の家財道具を一時的に交換して展示する。ホテルの一室の家具を、宿泊している間だけ配置換えして、それを撮影するシリーズもある。また、大きな公園に設置されたパブリックアートの数々を大きさ順に一列に並べなおすなど、大掛かりなものもある。あいちトリエンナーレ2013では、美術館の展示室内を、アーティスト自身が競技アスリートのように走り抜けて計測する映像作品のシリーズを展示予定。アーティストが走り抜ける姿とともに、美術館の展示室が運動感とスピード感を持ってガイドされ、展示室のこれまでにない見え方が提示される。

《Museums-Sprints (Alte Pinakothek München. 1:13.26 min)》2001
courtesy of Galerie Nordenhake, Berlin/Stockholm; Sies & Hoeke, Duesseldorf
© VG Bild-Kunst Bonn 2012



ミカ・ターニラ(Mika TAANILA)

1965年ヘルシンキ(フィンランド)生まれ。ヘルシンキを拠点に活動。ヘルシンキ大学で文化人類学を学んだ後、ラハティデザイン研究所の映像学科を卒業。科学技術の進歩に関心を寄せるターニラの作品は、記録映像と実験映画の両方の側面を持ち、現実とファンタジーを行き来する。テクノロジーと芸術が融合したユートピアや近未来的ビジョンは、一方で考古学や科学ファンによるアマチュアフィルムのような好奇心も覗かせながら、さまざまな角度から社会の中心に据えられた技術開発を観察、検討している。2012年ドクメンタ13で発表された《The Most Electrified Town in Finland》(2004-2012)は、フィンランド南西部ユーロヨキ自治州のオルキルオト島に2014年完成予定の原発「オルキルオト3」を撮影した作品。2基の原子炉を持つこの施設は、西欧ではチェルノブイリ原子力発電所事故後に作られた最初の原発となる。本作にはその賛否を議論するアプローチは見出されず、人口6千人ほどの小さな町の景観のなかで、新たな原子炉が建設されていく様が淡々と映し出される。ターニラが2004年から取り組んだ本作は、見る者に国家権力と地域の関係、ならびに経済効果を生む原子力エネルギー依存に陥った町の運命について考えさせる。あいちトリエンナーレ2013でも展示予定の本作には、主要都市と地方都市の間の格差も暗示され、日本でも福島を始め、原子力発電所を受け入れた多くの地方で生じる問題を浮き彫りにしている。

《The Most Electrified Town In Finland》2004-2012
photo: Anders Sune Berg in dOCUMENTA (13), Kassel, Germany, 2012

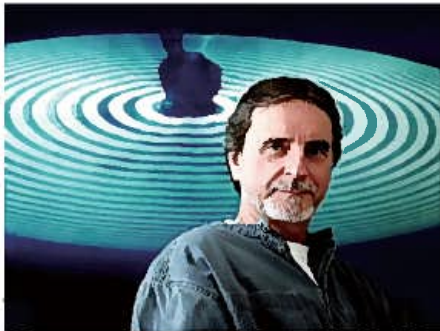


横山裕一(よこやま ゆういち / YOKOYAMA Yuichi)

1967年宮崎県生まれ。東京を拠点に活動。武蔵野美術大学油絵科卒業後、漫画家として活動し、2004年に『ニュー土木』で単行本デビュー。横山は、人物の何らかの行為や物体の移動、変形などに伴う時間の流れを描くことを意識し、タブローではなく漫画という形式を選択している。自ら「ネオ漫画」と呼ぶその漫画作品では、自然と人工物が奇妙に融合した近未来的な風景を舞台に、特異なファッションに身を包んだ無表情なキャラクターたちが目的の不明瞭な活動を繰り広げるさまが描かれる。セリフを殆ど用いずに、オノマトペと効果線を多用しながら進行するスピード感のあるコマ展開によって、まったく新しい漫画表現を確立し、国内外で高く評価されている。『トラベル』(2006)『ヘビーブーム』(2009)などの国内外での単行本の刊行と並行して、2010年川崎市市民ミュージアムでの個展「横山裕一 ネオ漫画の全記録:わたしは時間を描いている」をはじめ多数の美術館やギャラリーでの展覧会に参加。

『劇画(仮題)』2012

パフォーミングアーツ



イリ・キリアン (Jiří KYLIÁN)

1947年プラハ(チェコ)生まれ。振付家。1967年、英国ロイヤル・バレエ学校に入学し、1968年にジョン・クランコの招きでシュツットガルト・バレエに入団。1973年、オランダのハーグを拠点とするネザーランド・ダンス・シアター (NDT) の振付を初めて行う。以来、同カンパニーとの関係を深め、1978年に芸術監督に就任。1999年に退任したが、50作以上をNDTと共に創作した。2011年には、映像アーティストのジェイソン・アキラ・ソンマ (米国)と『Anonymous - a dance and video installation』を発表。現代バレエ/ダンスの最も重要な振付家の一人として、ますます精力的に創作を続けている。オランダ王国オレンジ・ナッソー勲章など受賞多数。キリアンの振付作品は、パリ・オペラ座バレエをはじめ世界中の名だたるバレエ団やダンスカンパニーが上演しているが、今回の新作はあいちトリエンナーレ2013での公演が世界初演となる。ハーグ在住。

courtesy of the Kylian Foundation



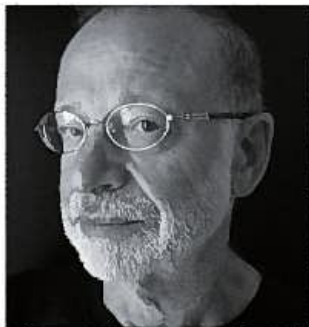
向井山朋子+ジャン・カルマン (MUKAIYAMA Tomoko + Jean KALMAN)

向井山朋子:アムステルダムを拠点に活動。1991年にオランダの国際ガウデアムス演奏家コンクールで優勝して以来、ピアニストとして、国際的に活動するオーケストラなどと共演するほか、映画監督、デザイナー、建築家、写真家、振付家らとのコラボレーションを行う。近年はビジュアル・アーティストとして『for you』(横浜トリエンナーレ2005)、『you and bach』(シドニー・ビエンナーレ2006)、『wasted』(越後妻有トリエンナーレ2009)などのインスタレーション作品を創作。2012年には、ダンス作品『シロクロ』(ダンストリエンナーレトーキョー2012)を創作・発表した。

ジャン・カルマン:1945年パリ生まれ。1979年より、ダンス、演劇、オペラの舞台美術と照明デザインを手がける。カレル・アベル、ゲオルク・バゼリッツ、ヤニス・クネリス、アニッシュ・カプーアら美術家、マウリシオ・カーゲル、ハイナー・ゲッベルスら作曲家と協働して舞台作品を制作。クリスチャン・ボルタンスキーとのコラボレーションも数多く、特に越後妻有トリエンナーレでの作品が知られている。1991年ローレンス・オリヴィエ賞照明部門を受賞。2011年には、ドラマ・デスク賞最優秀照明賞にノミネートされた。2012年より、ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーのアソシエイティッドアーティスト。

photo: Philip Mechanicus

photo: Tomoko Mukaiyama



プロデュースオペラ 『蝶々夫人』



安藤赴美子(あんど うふみこ / ANDO Fumiko)〈蝶々さん〉

北海道出身。国立音楽大学声楽学科卒業、同大学院声楽専攻(オペラ)修了。新国立劇場オペラ研修所第3期生修了。文化庁派遣芸術家在外派遣員としてイタリアに留学。パオラ・モリナーリ、セルジョ・ベルトッキの各氏等に師事。2009年東京二期会『椿姫』(宮本亜門演出 新制作)ヴィオレッタ役でプリマドンナとしての将来性を十分に印象付けた。2012年びわ湖ホール・神奈川県民ホール共同制作オペラ『タンホイザー』エリザベト役で出演。2013年には同プロダクション『椿姫』にヴィオレッタ役で出演予定。二期会会員。



カルロ・バリチェリ(Carlo BARRICELLI)〈ピンカートン〉

1968年生まれ。イタリアのベネヴェント音楽院で学び、その後F.コレリ、P.ヴェントゥーリの下で研鑽。ピンカートン役とロドルフォ役でオペラデビュー。イタリア紙『ナツィオーネ』から“強靱で活気に満ちた声に支えられたロマン的英雄の役に完全になりきるテノール”と評される。特にピンカートンでは、ヴェローナ野外劇場(セッフィレリ演出)、シュトゥットガルト州立歌劇場(ルイゾッティ指揮)、ブッチーニ音楽祭がある。ブッチーニを得意としており、理想的な声を持つテノールである。

演 目：ブッチーニ作曲『蝶々夫人』(全2幕・イタリア語上演)
公演日：2013年9月14日(土)、9月16日(月・祝)
会 場：愛知芸術文化センター大ホール
指 揮：カルロ・モンタナーロ
演 出：田尾下 哲
装 置：幹子 S.マックアダムス
照 明：沢田 祐二
衣 裳：半田 悦子
舞台監督：菅原 多敢弘
合 唱：AC合唱団
管弦楽：名古屋フィルハーモニー交響楽団

<http://aichitriennale.jp/>

お問い合わせ

あいちトリエンナーレ実行委員会
〒461-8525 愛知県名古屋市東区東桜1-13-2 愛知芸術文化センター6階
TEL:052-971-6111 FAX:052-971-6115
E-mail:geijutsusai@pref.aichi.lg.jp